

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 5 月 18 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02765

研究課題名(和文)理論言語学と生物言語学のインターフェイス

研究課題名(英文)Interface between Theoretical Linguistics and Biolinguistics

研究代表者

藤田 耕司(FUJITA, Koji)

京都大学・人間・環境学研究所・教授

研究者番号：00173427

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は記述・理論研究としての生成文法と、言語能力およびその起源・進化の生物学的基盤を扱う生物言語学の間にある乖離状態を改善するため、双方の成果を他方に反映させることで両者の円滑な接続を行うことを試みた。生物言語学的には、人間言語の基本統語演算操作である「併合」の進化的前駆体の解明を中心に行い、そこでの考察を動詞の他動性交替等の個別現象の分析に適用した。理論言語学的には、語彙項目についてはその進化が等閑視されていることに鑑み、語彙範疇・機能範疇の理論的研究に基づきそれらの進化様態を議論した。結果、これまで独立した事象とされてきた、統語と語彙の進化が密接に関係している可能性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

言語の起源・進化を巡る学際的研究(進化言語学ないし言語進化学)は近年、世界的な興隆を見せているが、言語学の立場からの貢献はまだ多いとはいえない。本研究は、生成文法の立場からこの問題に取り組み、理論言語学側から提供すべき知見や考察が多いことを他分野研究者に対して示したことが学術的意義としてあげられる。また言語進化は一般社会・市民にも十分訴求力を持つテーマであり、本研究の成果を一般向け講演や雑誌記事を通じて発信することで、これに応えることができた点が社会的意義としてあげられる。

研究成果の概要(英文)：The present study has attempted to bridge the gap between generative grammar as a descriptive and theoretical study of human language and biolinguistics as the study of biological foundations of human language and its origins and evolution, by incorporating the results of each endeavor to the other. On the biolinguistic side, the evolutionary precursor of the fundamental syntactic computational operation 'Merge' has been explored, and relevant considerations have been applied to an account of concrete phenomena such as transitivity alternation. On the theoretical side, given that the evolution of lexical items have been left largely untouched, the evolution of lexical and functional categories has been discussed on the basis of their theoretical studies. As a result, the possibility has emerged that the evolution of syntax and that of the lexicon have been closely intertwined with each other, contrary to the popular supposition otherwise.

研究分野：進化言語学・生物言語学・理論言語学

キーワード：シンタクス レキシコン 反語彙主義 運動制御起源仮説 統語・語彙平行進化仮説 汎用併合 原型語彙

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1. 研究開始当初の背景

20世紀半ば、Noam Chomsky が創始した生成文法理論は全人類共通の生得的言語基盤として普遍文法 (Universal Grammar) の存在を主張し、以来、言語の記述的・理論的研究を通じてその解明に取り組んできた。現在ではミニマリスト・プログラム (極小主義) の研究方略が採用され、従来とは正反対に、普遍文法の内実はいかに僅かでよいのかという観点からの研究が推進されている。普遍文法は定義上、人類固有の生物学的形質であり、それが実在するなら人類進化の中で出現したものでなければならぬ。このことから、生成文法は当初より、生物学的な色彩の濃いもの (生物言語学 *Biolinguistics*) であったが、これが明確になったのは極小主義の登場により、普遍文法自体の起源・進化を問うことが可能になって以降である。

本研究代表者もかつては生成統語論を主たる研究分野としていたが、極小主義の誕生以来、いち早く言語進化に研究の主軸を移し、生物言語学や進化言語学の分野で活動を展開してきた。

「言語進化の論理的問題」「ダーウィンの問題」「進化的妥当性」といった用語を海外の研究者に先駆けて用い、極めて学際性の高い言語進化研究に生成文法の立場からはどのような貢献が可能かを追求してきた。このように、各研究者は従来型の記述・理論言語学としての生成文法を継続するか、または、生物言語学的研究にシフトするかのいずれか一方に偏る傾向が強いという状況が長らく続くことになる。特に我が国においては、生物言語学に取り組む研究者は本研究代表者の他はごく少数であり、大多数を占める従来型の理論研究者がその研究を生物学の枠組みで捉え直すということは極めて稀であった。

本研究はこのような乖離状態が理論言語学・生物言語学双方の健全な発展にとって障害となっているという認識に立って計画された。主に本研究代表者自身がこれまでに行ってきた生成文法研究・生物言語学研究双方の成果を融合し発展させることで、両分野を架橋することができると考え、とりわけ理論研究を生物学的視点から捉え直すことで、その実現に迫ることとした。

2. 研究の目的

現在の生成文法 (極小主義) は言語の生物学的研究への接近が盛んに行われており、一見、理論言語学と生物言語学の融合は進んでいるかのように見える。しかし実情はこれとは異なり、理論研究の成果と生物学的研究の成果の双方向的フィードバックが整合的に行われることは極めて稀である。本来、生成文法は人類の生物学的・生得的認知能力の1例としての普遍文法の研究であり、その起源・進化を含めた生物学的研究に言語学を吸収ないし再編することが究極的な目的として掲げられていたのであるが (「人間生物学としての言語学」)、日々行われている膨大な生成文法研究の大部分はそれとは関係なく、観察された個別言語の分析を恣意的に提案された原理や制約に基づいて行うことのみで終始している。

一方で、学際性の高い言語進化研究において、言語学者に期待される貢献は、こういった記述的・理論的研究に基づいて言語能力やその進化のモデル化を行うことだと考えられる。またその際、単に言語現象の記述・分析に終わることなく、そこでの提案がどのような生物学的意義を有するのかを明確にすることで、生物言語学との連携が推進可能となる。

本研究の目的は、このような理論言語学と生物言語学の融合を図り、これによってより豊かな、生物学的知見に裏付けられた次世代型生成文法研究のあり方を提言することであった。

3. 研究の方法

前記の目的を果たすため、本研究では本研究代表者自身がこれまで行ってきた理論言語学的研究と生物言語学的研究の双方の成果を比較・検討し、相互に関連づけることを行った。

普遍文法の最大簡素化を目指す極小主義では、現在、その内実を基本統語演算操作「併合 Merge」に絞り込むことが試みられている。これは進化的に説明すべき対象を最小化することで、進化的妥当性の高い理論構築を行うことを意味しており、極小主義が言語進化研究にとっても有益な研究方略となっていることの良い例でもある。しかしながら、その併合自体の進化様態が極小主義内部で議論されることは稀であり、ただ突然変異による神経の再配線が示唆されるに留まっている。これでは併合もそれに先行する X バー理論等の理論的構成物と変わらず、その生物学的実態の有無や進化可能性を検証することができないという点が、大きな問題であった。

この問題に対し、本研究代表者は従来から「運動制御起源仮説」を唱えてその解決を図ってきた。これは概ね、併合が道具使用等に見られる物体の階層的組み合わせ能力に端を発し、領域一般的な汎用併合 (generic Merge) を経て言語固有の併合へと外適応的に進化したとするものであるが、その際、P. Greenfield が提案した Action Grammar を併合の異なる適用様式に対応づけることが大きな役割を果たしていた。特に、Action Grammar で人間固有だとされる Subassembly 方式と、そうではない Pot 方式との差違が、併合においても再現されると考え、Pot-Merge から Sub-Merge への拡張が人間言語の進化において生じたと主張するとともに、これら 2 つの適用様式の違いが種々の言語現象の分析においても重要な役割を果たすと論じてきた (図 1)。

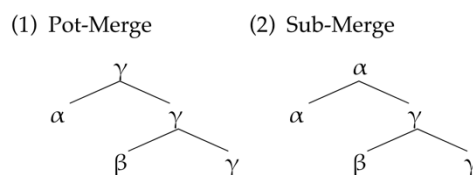


図1 Pot-MergeとSub-Merge

本研究はこの運動制御起源仮説を出発点として、一方ではこの仮説自体の洗練を行って併合

の進化についてより詳細なシナリオを提供すること、もう一方で、Pot-Merge・Sub-Mergeの相違に基づいた記述的・理論的研究を進めることを行い、両者の成果の融合により本研究の目的に迫ることとした。統語部門が併合のみに統一され、統語演算自体は通言語的に均質となったこと、またパラメータの効果はすべて統語部門ではなく外在化に関わる感覚運動システムに集約されたことにより、過去において展開された「比較統語論」の考え方は成り立ち難くなった。本研究はその成果の一部をPot-Merge・Sub-Mergeの言語間の相違として捉え直すことを提案するものでもある。併合が単なる理論装置を超えた、生物学的基盤を持つ進化的機構であることを運動制御起源仮説の精緻化によって示し、またその適用様式の多様性によって言語間の比較統語論的差異を説明することで、従来の生成文法研究をより進化的・生物学的に妥当なものとする事ができる。これにより理論言語学と生物言語学の架橋がスムーズに行えると考えた。

4. 研究成果

まず生物言語学的側面についてであるが、運動制御起源仮説に関して、これまで次の2点が未解決の問題であった。第一に、運動から併合への拡張がなぜヒトにおいてのみ生じたのか(図2の①の部分)。物体の階層的操作は人類固有ではなく、他種にも見られる行動であるから、それが他種では併合に拡張しなかった理由が必要である。第二に、Pot方式(Pot-Merge)からより複雑なSubassembly方式(Sub-Merge)への拡張がなぜヒトにおいてのみ可能となったか(図2の②)。Action GrammarにおいてすでにSubassembly方式はヒト固有であることが示されているため(例外として訓練を受けたチンパンジー)、これは言語固有の理由ではあり得ず、人類進化の過程で生じたより一般的な事情の反映でなければならない。

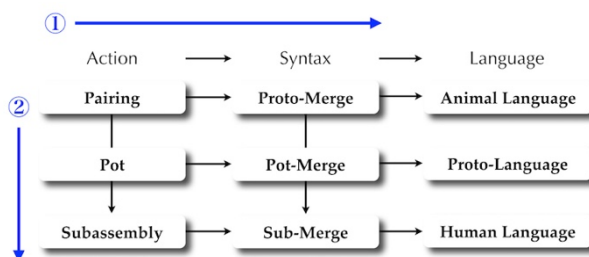


図2 運動制御起源仮説と言語の進化

これらの問題に対し、本研究では次のような提案を行った。①については、言語の抽象的概念を具象物のように扱えることが重要であり、このようなメタファ的拡張は、概念の外在化により可能となると論じた。比較心理学の立場から、概念はヒト固有ではないがそれを語のような言語記号として表出できるのは人間だけであると示唆されることがあるが、この提案はそれに基づいている。またこの提案では外在化が併合の進化に必要であり、外在化を副次的で進化的にも後から生じたものとして扱う現在の生成文法への問題提起ともなる点が重要である。次に②については、Pot方式が単一のターゲットに対して順次他の要素を結合するのに対し、Subassembly方式では複数のターゲットに注意を払うことが必要となることに注目し、この「多重注意」がヒト進化における自己家畜化に起因するという仮説をたてた(図3)。(自己)家畜化は近年の言語進化研究において非常に注目されているが、それは主に向社会性やコミュニケーションの観点からである。しかしここでいう多重注意も、新奇性に対する警戒心の低下や刺激に対する反応抑制等、いわゆる家畜化症候群の例として考えられるのではないか。このことは統語の進化も社会性やコミュニケーションと共通の基盤を持つことを意味しており、それらの要因を等閑視する生成文法の議論に一石を投じることになると思われる。

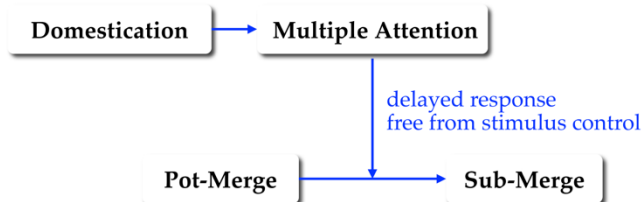


図3 (自己)家畜化と統語の複雑化

次に理論言語学的側面については、Pot-Merge・Sub-Mergeの差違が、言語進化のみならず、言語の通時的・共時的多様性のいずれにも関与するという仮定に立ち、それぞれの事例について考察した。まず取り上げたのは、John broke the glass. / The glass broke. のような他動性交替現象である。伝統的な分析では、このような動詞の自他交替は、関与する範疇決定子 v が外項を取るか取らないかの違いから生じるとされてきたが、これは問題の現象を v の異なるタイプに置き換えただけの語彙主義的分析であり、説明とは言い難い。そこで v には1種のみあり、これがV(ないしRoot)と結合する際に、それがPot-MergeによるのかSub-Mergeによるのかの違いが生じると主張した(図4)。

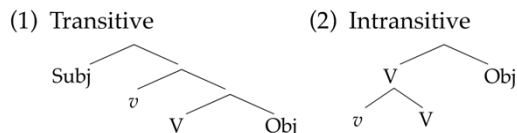


図4 併合適用様式と他動性交替

図4の(1)は従来の他動詞構造であり、外項への θ 付与および内項への θ 付与・格標示がそれぞれ実現されているのに対し、(2)では v とVがSub-Mergeにより先にチャンク化されているため、 v が潜在的に持つ素性が実現されない。結果、内項への θ 付与だけが可能であり、これが自動詞(能格ないし非対格動詞)の構造に該当する。このSub-Mergeによる潜在素性の抑制は、Pair-Mergeが持つ効果を吸収するものであり、統語演算としてのPair-Mergeの必要性自体をも疑問視する効果を持つであろう。同様のPot-Merge・Sub-Mergeの対比により、通時的多様性については文法化現象(語彙範疇と機能範疇のSub-Merge)等、共時的多様性については日本語にお

ける間接受動態の存在と英語における不在（間接受動は *v* と受動形態素が *Sub-Merge* によるチャンク化を受けない）等を分析した。しかしながら、ではなぜ英語では *Sub-Merge* しか許されないのかという問題は未解決であり、ただ同様に分析できる日英間の対比が他にもあることを指摘したに留まる。また上述の他動性交替の分析によれば、自動詞構造の派生のほうがより複雑で、進化的にも後から発生したことが予測されるが、L. Progovac は独立した根拠により他動詞の進化を後としており、この齟齬をどう解消するかも課題として残っている。いずれにしても動詞は項構造や事象構造を始め、文の中核的構造の要であり、動詞の進化を巡る研究がこれまでの記述的・理論的な動詞研究にもたらす影響は大きいと言える。

より一般的には、語彙の起源・進化も言語進化研究上の大きな課題として残る。これまで、生成文法では併合を中心とする統語演算系が人間言語に真に固有の部分であるとして、集中的に議論されてきたが、語彙もまた同様に言語固有のものだと考えられる。しかしその語彙の進化についてはまったく手つかずの状態であって、結果的に言語進化はまだほとんどが解明されていないことになる。上で、他種においても概念形成は行おうがそれを語等の言語信号として外在化するの人間だけであるとした。しかしながら、このことは、人間の概念と他種の概念がその複雑さや抽象度において等しいということの意味してはいない。むしろ、他の大型霊長類が有する基本概念をヒトも生得的に備えており、ヒトはそれを併合で組み合わせてより複合的な概念を形成し、それを文や語として外在化していると考えられる。

過去において行われてきた動詞句構造と語彙概念構造ないし事象構造との実質的同形性を巡る語彙意味論的研究は、そのことを示唆している。それは例えば本研究代表者が過去に提案した三層分裂動詞句構造において特に顕著である（図 5）。分散形態論（distributed morphology）等の反語彙主義アプローチでは、語も統語派生の出力として位置づけられているが、今述べた想定はこのような立場とも整合しており、分散形態論を言語進化研究に適用する可能性が示唆される。

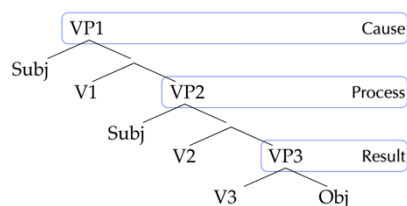


図5 分裂動詞句の事象構造解釈

この考察に基づき、本研究では人間言語の高度に発達

した語彙は、他種と共有される基本概念が併合によって階層的に組み合わさったものであるとの主張を行った。問題は、他種の持つ概念を明確に特定することが現在の動物行動学の知見では難しく、個々の事例研究に基づいて推定する以外にないという点である。これについては今後も引き続き検討したい。

本研究では以上のような研究成果を、国内外の学会講演、論文、書籍等を通じて広く発信した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 Kei Kashiwadate, Tetsuya Yasuda, Koji Fujita, Sotaro Kita, Harumi Kobayashi	4. 巻 11
2. 論文標題 Syntactic Structure Influences Speech-Gesture Synchronization	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Letters on Evolutionary Behavioral Science	6. 最初と最後の頁 10-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5178/lebs.2020.73	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 藤田耕司	4. 巻 41
2. 論文標題 コミュニケーションを超える人間言語	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Nextcom	6. 最初と最後の頁 46-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 藤田耕司	4. 巻 --
2. 論文標題 階層性と意図共有に共通する認知基盤	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本認知科学会第36回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 1005-1007
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Koji Fujita	4. 巻 15
2. 論文標題 Syntax, Cooperation and Self-Domestication	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 International Cognitive Linguistics Conference 15 Book of Abstracts	6. 最初と最後の頁 --
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Koji Fujita	4. 巻 12
2. 論文標題 Non-communicative functions can be equally important for studies of language evolution	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Proceedings of the 12th International Conference on the Evolution of Language (Evolang12)	6. 最初と最後の頁 131-133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.12775/3991-1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Koji Fujita	4. 巻 43
2. 論文標題 On the parallel evolution of syntax and lexicon: A Merge-only view	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Journal of Neurolinguistics	6. 最初と最後の頁 178-192
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jneuroling.2016.05.001	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Koji Fujita	4. 巻 -
2. 論文標題 What was the original function of language?	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 JSL2016: Handbook of the 18th Annual International Conference of the Japanese Society for Language Sciences	6. 最初と最後の頁 13-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田耕司	4. 巻 50
2. 論文標題 言語進化とコミュニケーション	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 フランス語学研究	6. 最初と最後の頁 148-151
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Koji Fujita & Haruka Fujita	4. 巻 -
2. 論文標題 Integration Or Disintegration?	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 The Evolution of Language: Proceedings of the 11th International Conference (EVOLANG11)	6. 最初と最後の頁 430-432
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.17617/2.2248195	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計14件(うち招待講演 8件/うち国際学会 7件)

1. 発表者名 山本祐誠・藤野博・松井智子・小林春美・藤田耕司・東條吉邦・計野浩一郎
2. 発表標題 ASD 児における指示が不透明な文の理解と視点取得の関係
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤田耕司
2. 発表標題 階層的シンタクスと(自己)家畜化
3. 学会等名 日本歴史言語学会2019年大会シンポジウム『進化言語学への招待』(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤田耕司
2. 発表標題 階層性と意図共有に共通する認知基盤
3. 学会等名 日本認知科学会第36回大会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Koji Fujita
2. 発表標題 Syntax, Cooperation and Self-Domestication
3. 学会等名 International Cognitive Linguistics Conference 15 Theme Session “Evolinguistics: Where Cognitive Linguistics and Generative Grammar Meet.” (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Koji Fujita
2. 発表標題 Where did Merge come from? A sensorimotor basis of hierarchical structure building.
3. 学会等名 The 3rd Crete Summer School of Linguistics (CreteLing 2019) Workshop “Human Language in Evolution: Some Key Perspectives.” (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Koji Fujita
2. 発表標題 From Action to Syntax: Some Evolutionary Considerations
3. 学会等名 NII Shonan Meeting Seminar 141: Language as goal-directed sequential behavior: computational theories, brain mechanisms, evolutionary roots (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤田耕司
2. 発表標題 言語と声と音楽 その進化的関係を探る
3. 学会等名 「声の力を学ぶ」連続講座 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Koji Fujita
2. 発表標題 Generative Grammar from an Evolutionary Perspective
3. 学会等名 Tokyo Lectures in Evolving Linguistics 2019 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Koji Fujita
2. 発表標題 Non-communicative functions can be equally important for studies of language evolution
3. 学会等名 Evolang12 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Koji Fujita
2. 発表標題 Evolinguistics: What Is It, Who Does It, and How Will It Evolve? The Evolution of Hierarchical Linguistic Structure
3. 学会等名 Kyoto Conference on Evolving Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤田耕司
2. 発表標題 生成文法は進化言語学や生物言語学にどのように貢献できるのか (または、できないか)
3. 学会等名 名古屋哲学フォーラム「言語・進化・生物：生成文法の哲学をつくる」(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤田耕司
2. 発表標題 人間言語はどのようにして生まれたか 併合がもたらす統語と語彙の平行進化
3. 学会等名 日本人間行動進化学会 第9回年次大会(招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 藤田耕司
2. 発表標題 ヒト言語の構造依存性とその進化
3. 学会等名 日本進化学会 第18回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Koji Fujita
2. 発表標題 What was the original function of human language?
3. 学会等名 言語科学会 第18回国際年次大会 (JLS2016) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計14件

1. 著者名 岡ノ谷一夫(編), 藤田耕司他(著)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 玉川大学出版部	5. 総ページ数 160
3. 書名 ことばと心	

1. 著者名 畠山雄二（編集委員長），藤田耕司他（監訳）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 552
3. 書名 英文法大事典シリーズ3『名詞と名詞句』	

1. 著者名 畠山雄二（編集委員長），藤田耕司他（監訳）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 340
3. 書名 英文法大事典シリーズ8『接続詞と句読法』	

1. 著者名 遊佐典昭（編），藤田耕司他（著）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 339
3. 書名 言語の獲得・進化・変化ー心理言語学, 進言言語学, 歴史言語学ー	

1. 著者名 畠山雄二（編集委員長），藤田耕司他（監訳）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 552
3. 書名 英文法大事典シリーズ2『補部となる節・付加部となる節』	

1. 著者名 畠山雄二（編集委員長），藤田耕司他（監訳）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 324
3. 書名 英文法大事典シリーズ7『関係詞と比較構文』	

1. 著者名 畠山雄二（編集委員長），藤田耕司他（監訳）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 324
3. 書名 英文法大事典シリーズ5『前置詞と前置詞句，そして否定』	

1. 著者名 畠山雄二（編集委員長），藤田耕司他（監訳）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 239
3. 書名 英文法大事典シリーズ4『形容詞と副詞』	

1. 著者名 畠山雄二（編集委員長），藤田耕司他（監訳）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 202
3. 書名 英文法大事典シリーズ0『英文法と統語論の概観』	

1. 著者名 高見健一他（編），藤田耕司他（著）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 517
3. 書名 不思議 に満ちた言葉の世界	

1. 著者名 畠山雄二（編），藤田耕司他（著）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 303
3. 書名 理論言語学史	

1. 著者名 畠山雄二（編），藤田耕司他（著）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 496
3. 書名 最新理論言語学用語事典	

1. 著者名 Koji Fujita & Cedric Boeckx (eds.)	4. 発行年 2016年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 276
3. 書名 Advances in Biolinguistics: The Human Language Faculty and Its Biological Basis	

1. 著者名 藤田耕司・西村義樹 (編)	4. 発行年 2016年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 474
3. 書名 日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ-生成文法・認知言語学と日本語学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

理論言語学と生物言語学のインターフェイス http://www.bioling.jp/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	ブックス セドリック (BOECKX Cedric)		海外研究協力者